映像はいかにして保育者の「反省的思考」を促す装置となりうるか
――「第三者による解釈」の必要性――

岩　田　遵　子

How Can the Videotape Let the Teacher Reflect His Practice?

Junko Iwata

要　旨：
保育者は保育実践後に自身の実践を省察し，自身の援助行為についての妥当性を検討する必要があり，そのために実践を収録した映像は有効と思われる。しかし，映像はそれのみでは保育者の反省的思考を促す装置にはなりえない。保育者がある固定観念にとらわれている場合は，映像を視聴する場合においても固定観念に囚われたまなざしで読み取ってしまう危険性が高いからである。映像が省察を促す装置となるためには，固定観念にとらわれていないがゆえに「事実的判断」を優先させることのできる第三者が実践を収録した映像を解釈し，それを保育者の解釈と突き合わせることが必要である。

キーワード：
「反省的思考」　映像　「第三者記録」　「事実的判断」　「価値判断」

Ⅰ　はじめに

保育者の子どもの遊びに対する援助が適切なものであるためには，保育者が自らの保育実践に対して反省的に思考することが必要である。すなわち，保育者は，子どもの遊びを読み取り，それに基づいて援助を構想し，実際に援助を行い（遊びに関わる），その後，自らの援助行為についての妥当性を判断し，必要があれば再度援助を構想し，実行するのである。しかし，このような自らの実践に対する「反省的思考」は，保育実践中に保障されているわけではない。保育者が遊びに関与する際に，遊ぶことに夢中になってしまったら，遊びを見取ることはできないからである。この意味で「見る」ことと「関わる」ことは連続面も持つが断続面も持つことを，筆者は別稿（岩田　2009，小川・岩田　2009，2010）で論じ，保育者のパースペクティヴの展け方及び意識のあり方について，ノリ[1]（リズム）の視点から考察した。保育者が遊びのノリ生成の当事者である場合はパースペクティヴが展けず，そのため遊びのノリを俯瞰することはできない（「当事者的直観」）が，遊びのノリ生成から外在的になるとパースペクティヴを展くことができ（「直観的思考」），ノリについて判断すること（「反省的思考」）が可能になることを事例をもとに論じたのである。ただし，保育者が遊びのノリからたとえ外在的になったとしても，実践中における「反省的思考」には限界がある。

実践中には，熟考する余裕はないからである。このような限界を越えるために，保育後に自らの実践を省察する場となる記録（当事者記録）は有効だと思われる。

しかしながら，保育者に特定の子どものパーソナリティや行動についてのある固定観念がある場合には，記録が自らの実践を省察する場とはなりえないことを，筆者は別稿（岩田　2010）で指摘した。遊びのノリから外在している保育者が，人間関係についての固定観念があるために，遊びのノリの変化を読み取ることができず，また記録を書く場においても，遊びのノリを想起することができないために，自分の固定観念によって場面を選択的に構成してしまい，実践を省察することができないことを，事例をあげて論じたのである。

そのような場合，保育者の自己省察が可能となるためには，固定観念に囚われていない第三者による記録が必要となる。「第三者記録」をもとに遊びのノリの変化を明らかにし，保育者の当事者記録と突き合わせ，保育者がなぜノリの変化を捉えきれていないか，を考察することによって，保育者は自らの固定観念を自覚することが可能となるだろう。

このような「第三者記録」として，保育実践が撮影された映像は有効性を持つと思われる。なぜなら，映像は，保育者が遊びのノリからは完全に外在することを可能にし，それゆえ自らの実践を対象化することを容易にする装置であるばかりでなく，カメラアイは結果的に主観性を排除することを本質としているので，実践の現場における実践当事者や観察者が捉えきれない「意外な」（選択的配慮を無視するようなかたちで）情報をも含んでいるからである。このような映像の特質は，保育者の固定観念を相対化し，自己省察を促す方向に働く可能性が生まれるだろう。先入観に支配されている保育者のまなざしは，見ようとするものしか見えない場合が多いのに対して，保育者の見ようとしない情報を含む映像は，必然的に保育者の見方を相対化する可能性を持つことになるからである。

しかしながら，実践の映像をそのまま保育者に提示しても，「記録」としての有効性を発揮し得ない。というのは，映像情報そのものは意味を持たず，視聴者の解釈の枠組みによって読み取られるがゆえに，固定観念に呪縛されている保育者が映像を見ても，それに呪縛されたまなざしで映像情報を読み取ってしまい，遊びのノリの変化を読み取ることができない可能性が高いからである。映像情報は，そのままでは，保育者の見方を相対化し固定観念の自覚化を促すような「反省的思考」を可能にするとは限らないのである。

そうだとすれば，映像は，保育者にどのように提示されれば，保育者が自らの実践を省察するための「記録」としての有効性を発揮しうるのだろうか。

結論から言えば，映像が「反省的思考」を促す装置となるには，保育者の呪縛されている固定観念に囚われていないまなざしで映像情報を読みとり，保育者の読みとれない情報を言語によって記録として構成し提示する第三者の存在が必要となる。第三者は固定観念に囚われていないがゆえに，映像情報から遊びのノリ生成のありようを読み取り，言語化することが可能である。そして，映像を言語化した記録（これを以下「映像による記録」と呼びたい。[2] なお概念定義については注2を参照のこと）は保育者と第三者

が遊びのノリについての共同認識を構築するための媒介となると考える。

本稿では，そのことを事例をもとに論じたい。取り上げる事例は，本紀要前号で取り上げた事例と同じものである。そこで論じたように，ある幼稚園の5歳児クラスにおいて展開されたレストランごっこに関与するとき，保育者は，遊びのノリにノリつつ，瞬時にそのノリを潜在化して自らを輻輳点とするパースペクティヴを展き，眼前のノリとそれまでのノリ及びそこから予測されるノリを比較し，ノリを選択するという判断が行われたという意味では「反省的思考」がとりあえずは働いていたとみなすことができたのだが，子どもの人間関係についての固定観念を持っていたために，ノリの読み取りが不充分であり，その遊びについての当事者記録もノリの流れが想起されないまま固定観念が先行した物語となってしまい，本来実践について省察する場であるはずの記録が，そうなってはいなかった。この場合，保育者に映像のみを提示しても，そこには固定観念とは異なる遊びのノリが含まれているにもかかわらず，そのノリを読み取ることができず，自らの実践の省察にはつながらなかった（岩田　2010）。保育者が自らの見方を省察し固定観念に気づくためには，固定観念に囚われていない第三者が映像に含まれている遊びのノリの変化を読み取るための「第三者記録」を作成し，それを保育者の読み取りと突き合わせることが必要だと考える。

以上のことを，まず，保育者が人間関係についての固定観念に呪縛されているために，実践中も記録の場においても「反省的思考」が働かず，実践を省察することができていない実践及び記録と第三者としての筆者の分析を示す（前号の事例と分析を再掲）。そして，保育者の語り（解釈）と「第三者の解釈」を「映像による記録」と照合し，固定観念に囚われていない後者が固定観念に囚われた前者よりも解釈妥当性が高いことを示し，続いて，後者によって前者を照らし出し，「保育者の解釈」がどのようにして映像解釈において乖離し，観念化されてしまうかを明らかにする。この手続きを通じて，映像情報が保育者の実践の省察にとって有効な装置となりうるためには，それを第三者が解釈することによって構成される「第三者記録」を保育者の解釈と突き合わせることによってであることを論じたい。

Ⅱ　保育者が固定観念に呪縛されているために，実践，記録の場において「反省的思考」が不充分となってしまっている実践例

次に示すのは，保育者が実践中にある面では「反省的思考」を働かせることができているにもかかわらず，子どものパーソナリティと人間関係についての固定観念を持っているために，実践中には遊びのノリの変化を読み取ることができず，そのことが記録にも表れ，結果として記録を書く場が自身の実践を省察する場となりえていない事例及び「Tの語り」（保育後に，この場面のVTR記録をTと共に見ながら筆者がTに行ったインタビュー記録を文章化したもの）[3] とその事例に対する筆者の分析である。これらは，本紀要の前号に掲載したものと同一であるが，本稿の考察上必要なので，長くなるが再掲する。そこにおいて筆者は，5歳児クラスのレストランごっこの実践を取り上げ，次のことを明らかにした。レストランごっこの遊びの展開過程にお

いて，遊びのノリ及びそのノリ生成のメンバーは変化しているにもかかわらず，担任Tの記録はそれを捉えておらず，レストランごっこは当初レストランごっこをやりたいと言っていた3人が一貫して生成し続けたものとして記録されていた。それは，Tがこの遊びはその3人によって生成されるべきだという観念で見ているためであり，その見方は子どもたちそれぞれのパーソナリティについての固定観念と結び付いていることを分析によって明らかにした。実践当事者がこのような固定観念に囚われている場合，記録も，この固定観念から解放されず，それに囚われた物語を構築してしまい，結果として，自らの実践を省察する場であるはずの記録の場が，自己省察の場になりえないのである。

(1)事例

【レストランごっこの場面】

a）レストランごっこが始まる：①5歳児クラス4月下旬のある日の遊びの時間。D男，K男，R男が「レストランをやる」と言って，積み木で少し場を作り始め，場が完成しないうちに中に座っておしゃべりをするばかりで進展しない[1]ので，Tが場作りを手伝うと，一緒に動いて作り始めるが，すぐにまたおしゃべりが始まり，そのうちに誰もいなくなってしまう（K男とD男は製作コーナーにいる。K男はメニューを書いている[2]）。しばらくすると，他のコーナーにいたM子が中にひとりでメニューを書いている。

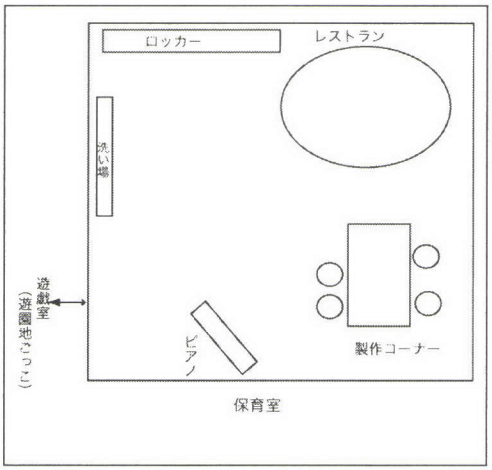


図1　保育室の環境図

②Tがそこに加わり「パスタ……，他に何がある？」と言いながら一緒にメニューを書き，「D男コックさん，お客さんがいるので来てください」と言ってD男を呼ぶ[3]と，D男がコーナーに来て「客」（T）の注文に応じて料理を作り始める[4]。D男がコックらしい動きを始めたので，Tが「D男コックさん，さすがですね～」と褒める[5]。

> **Tの語り**：K男とD男とR男の3人が，レストランするって言ってたのに，なんか……，こう……，枝葉のことをやっていたんですよね。メニューがどうとか。M子がひとりで，ここ（レストランコーナーの中を指す）で書いていて。M子はメニュー書くんだったらレストランのお友だちに分かるようにした方がいいと思って。それで，私がここに（レストランコーナーに）来て「何があるの？」って訊けば，きっとこの子たち（製作コーナーにいるK男とD男）も聞くだろう，と思って，それで，そういうのがあるんだ～って大きな声で言いながらこのふたり（K男とD男）になげかけてみようと。それで，ちょっと流れを作ろうと思って，メニューの紙を持ってきてこんな感じなのかな，って。

③レストランコーナーの中が活気づき，コーナーの周りに遊戯室で遊園地ごっこをしていたS男たちを含む5，6人の子どもたちが集まってきてレストランの中を見ていたが，しばらくするとまたそれぞれの遊びに戻る。しかし，S男とY男は「遊園地」には戻らずに，そのまま「レストラン」の中に入ってしまい，遊園地で遊んでいた作ったウサギと共にテーブルの所に座って「ウサギの丸焼きだ～」などと言って騒ぎ[6]，そのうちに「すみませ～ん。コロッケ下さい」「ハムスター用のエサ下さい」とさかんに注文を始め[7]，D男は調理台の前に座ってそれに応じるようになり[8]，客とコックのやりとりが盛り上がる。Tはそれを見て「よかったねえ，コックさん。お客さんがたくさん来てくれて」[9]と言いながら，「アルバイトしていいですか？」とD男に訊いて（D男は頷く）コッ

クのアルバイト役を担って材料を「買い出し」（料理作りのための材料を製作コーナーから持ってくる）に行ったり10して，遊びの様子を見つつ次第に壁の方に座る位置を移動する。M子は，「パスタありますよ」等と言いながら，ずっと座ったまま紙を切ってパスタを作っている。

> **Tの語り**：（製作コーナーに取りに行った材料は）毛糸です。D男が紙で作るんだなあ，って思って。紙で作るのもいいんだけど，何か新しい素材があるといいなって思って。（「アルバイトしていいですか？」と言ったのは，）それまでは私はお客さんだったので。座る位置は，遊び全体が見られること，部屋の中の他の遊びが見られる場所になるようにしています。ここで（座る位置がロッカー壁の近くに）移動するのは，（私がさっきまではお客さんだったけど）バイトになったから，ちょっとお店の人よりになろうと思って。こっちが厨房，こっちのテーブルのある所がお客さんの場所，という風に本当は分けたかったんです（と言いながら映像上で客席と厨房の境界に線を引く）。こう分けたらいいよって言いたかったんだけど。

④R男がレストランコーナーの側に来てTに「レストラン，やりたい」と言い，Tが厨房の隅の所に椅子を出してR男に示す11と，R男はすぐには座らず，「パスタ作ってあげる」と言って棚の中やテーブルの上の材料を探し，毛糸を見つけると，Tの出した椅子に座ってパスタを作り始める。

> **Tの語り**：（椅子をR男に出して示すのは）R男が来て声をかけてきたから，もしかしてここに入ってくれるといいな，と思って。（「R男が椅子に座りかけるけどすぐには座らない」と筆者が映像を見ながら呟いたのを聞いて）接客業が嫌なんです。作る方が好きなんですよ，彼は。

K男は製作コーナーでずっとメニューを作っている。その様子をレストランコーナーの隅で見ていたTは，製作コーナーに戻り12，K男に「レストランにお客さん来てるよ」と言う13とK男はメニューを持ってレストランコーナーに来て相変わらずメニューを書き続ける。Tは，製作コーナーで紙を切ったり，側にいるC子の様子を見たりしつつ，遊戯室（製作コーナーから見える）の遊園地ごっこと保育室内のレストランごっこにときどき目をやりながら，遊びの状況を見ている。

> **Tの語り**：S男とY男が入ったのは乗っ取りですね。この二人は，いつも他の子どもたちが面白そうな遊びをやっていると，すぐ嗅ぎつけて自分たちが真ん中に入って乗っ取ったり，壊したりするんです1。私がアルバイトになったのは，D男のコックさんがスパゲッティを作る材料を取りに行こうと思ったからです。ただ，ずっとアルバイトをしていると私が遊びから抜けられなくなるので，誰か入ってくれないかな，と思ったら，R男が声をかけてきたので，もしかしてここに入ってくれるといいな2，と思ったのです。それで，遊びから抜けてもいいかなあって思いながら抜けたのです。ただ心残りは，（製作コーナーでメニューを作っている）K男がここ（レストランコーナー）に入って欲しかったんだけど3……，それで，製作コーナーに戻ってからちょっとK男に入るように促したんです4。でも，（製作コーナーに入ってもメニューを書き続けているのは）K男は集中しちゃうんです。真面目な子で，これ，と思っちゃうと没頭しちゃって周りが見えなくなってしまう子なんです5。

b）S男たちとD男の間に「対立」が生じ，TがD男を支えようとする：①客（Y男やS男）からの注文が矢継ぎ早に続いて，D男は少しイライラした様子で「店長！K男店長も手伝ってよ！」と，あいかわらずメニューをひとりで書きながら製作コーナーにいるK男を呼ぶ。K男は，D男の方をチラッと見るが，すぐにメニュー作りを続ける。さきほどからコーナーの中をうろうろと動き回ったり，自分の前に突っ立って大きな声でうるさく注文し，ともすれば調理台の方に侵出してくるS男とY男に向かって，D男は「S男くん，（ここには）居られないよ」と言う14。D男は，S男たちが賑やかに動き回り，調理台の方に来てモノをいじったりするのが面白くないらしい。S男とY男とD男の間に少し緊張が走り，S男とY男はやや呆然とする9。D男が続けて，「食べるなら，

いいけど……，泊まるなら，（棚を見て指しながら）作れるよ」と言う。M子が「M子は，明日までここに泊まることにしたの」と言う。S男は困ったように「あのさあ，僕，食べるから，ここにおいてよ」と言い，Y男が「Y男も」と言う。D男は「いいよ」と答え，S男は「じゃ，オムライス下さい」と言うと，D男は「はい」と頷き，S男はさっきまで居たテーブルの所に戻る。Y男は「あの，ちょっと待ってて下さい」と大きな声で言いながら上着をロッカーに置いてきてから，「Y男も入れて，D男くん」と頼むと，D男が「泊まるだけだよ」と言い，Y男が「いいよ」と答える。それを見ていたS男が心配そうにテーブルから出てきて，D男の方に行き，「でもさあ，何か食べるならここに居てもいいんでしょう？」と訊くと，D男が目を上げずに料理を続けながら「うん」と言う。

②レストランごっこに少し緊張感が漂っているのを見ていたTが，製作コーナーから段ボール箱（ピザの道具にするつもり）を持って，コーナーの横に立ち，コーナーの中の端でパスタを作っているR男に段ボール箱を示しながら，ちらっとS男を見てさりげなく「お客さんで来たんでしょう？」[15]と言って，すぐにR男とピザの話をする。S男たちは少しおとなしくなる[16]。D男は「スパゲティの方？」とスパゲティを盛りつけた皿を持って言うと，「はい」とM子が手を挙げて料理を受け取る。が，しばらくして「お箸が無いんだけど」とD男の所に行って探そうとすると，D男が調理台から立ち上がり，棚に行って箸を探しM子に渡す。Tは，コーナーの外側から身を乗り出して，調理台の上を整理するふりをしながら遊びの様子を伺っている。

Tの語り：S男とY男が仲間に入るのが，D男は嫌なんですね[6]。いつもこのふたり（S男とY男）は後から来て（遊びを）乗っ取っちゃうから[7]。それで，R男くんとかがいられなくなったりすることもあって。だからたぶん，入れるのが嫌なんだと思います。段ボールを持ってきたのは，R男に，これピザの材料にどう？って言おうと思ったんだと思いますけど，遊びの側に（私が）来たのは，S男とY男が入りたいと言っているから，きっとトラブルになるだろうなあ，って想定して[8]。どういう行方になるかなあっと思って側に居るんだと思います。仲間には入らないで，さっきみたいにどっぷりつからないで，様子を伺っていようと思って。

（「お客さんできたんでしょう」と言うのは）S男とY男に，仲間に入って欲しくない[9]，というか，お店の人ではなくて，お客さんとしてやりとりをしてほしい[10]，というのがあるんです。というのは，このふたりがお店の人になっちゃうと，このふたりが生き生きと作ったり，接客してしまったりしてD男たちの遊びが壊れると思って[11]。D男は，幼いところもあるけど，作る力があって，リーダーになって遊びを引っ張ってゆくことができる子なんですけど[12]，D男とR男とK男は，S男たちに比べるとちょっと弱い[13]ので，せっかく3人が一生懸命遊んでいるのに，それを壊してしまうと思ったので入って欲しくないなっていうのが頭にあったんです[14]。D男が「いいよ」って言うならいいんですけど，渋っているので，こっち（S男）はお客さんなんでしょ？っていうのをひとこと言いたかったんです[15]。S男は壊すことが多いから，S男とY男がくっついちゃうと，すぐ壊したりするので[16]，そこはいつも注意して見ています。家庭にも問題があるので，私は園では（S男）を可愛がっていて，年少の時に比べると大分よくなってはきたんですけど。

c）再びS男たちの動きが活発になり，D男はそれに応じ始めるがK男は圧倒される：①Tに「お客さんできたんでしょう」と言われた後，S男とY男はしばらく黙って立っていたが，テーブルの席に戻り，S男は「ハムスター専用のご飯下さい」，「お水下さい」と再び次から次へと注文するようになり，Y男は「人のコロッケと～，ウサギのコロッケと～」とD男に付いて回ったり[17]，Tに向かってしつこく自分の注文を主張したりしている。D男は，「ちょっと待って下さい」と答えながら，作業を続ける[18]。しばらくの間，コーナーの外側に立って作業をしながら（棚の上を片づけるなど）中の様子を伺っていたTは，椅子（中にあった椅子を自分で移動させてた）に腰をおろし，それまで遊園地ごっこにいたR男が「僕がパスタ作ってあげる」と言ったのを聞き，「Rちゃんがパスタ作ってくれるって」とD男たちに聞こえるように言い（D男はそれには応えない），段ボールを切っての材料を作るふりをしながら，遊びの様子をちら

ちらと見るようになる。

Tの語り：(椅子に腰掛けるのは，D男とS男とのやりとりを見ていて)これは長引きそうだなあっと思って。遊戯室の遊びが気になっていたので，そちらに行こうと思って立っていたんですけど，ちょっと，これはS男たちがまとまりそうにないなあ，と思って。やっぱり，遊びが壊れるのが一番嫌だから。遊びが続いて楽しいのがいいと思って，ここに座ったんです。椅子を動かしたのは，見る位置をここに作ろうと思ったからです。(中に入らないのは) 中だと，アルバイト（役に）なっちゃうから，外に(作った)。外から見ようと思って。

コーナーの隅でパスタを作っていたR男がパスタを盛りつけた皿を持ち「はい〜」と皆に見せるが[19]，S男は，僕が頼んだのは卵の載ったオムライスで，パスタではない，と言って受け取らず，不満げに「オムライスを作って下さい！」と大きな声できっぱりと言う[20]。それを契機にR男はコーナーを離れてしまう[21]（以後レストランの近くに来たり遊戯室に行ったりしている)[22]。その間，レストランの外側では，ずっとメニューを書いていたK男が出来上がったメニューをTに見せに来てTと話している[23]。Tに渡そうとする。Tは「D男くんに渡してごらん」と言い，K男が「メニュー出来たよ」とD男に渡すと，受け取ったD男が「はい」とすぐにS男に渡してしまおうとするので，Tが「メニューだよって」と，K男の言葉をなぞるように言う[24]。するとD男が「メニューだよ」とTの言葉を復唱して言う。

Tの語り：(映像を見ながら，R男が作ったパスタをS男が拒否し，R男が遊びから出て行き，遊園地の遊びの方に行ってしまったことを筆者が指摘する（イ）と）スパゲティ作ってるんで……，(ロ)　あ，いなくなっちゃうんですか（ハ)。スパゲッティを作ったのに怒られて気分を悪くしたから？(ニ)　ああ……，かわいそうなことしちゃった。せっかく入ったのにねえ。なんでだろう……[17]。R男は凄く構成力もあって，遊ぶ力もあるのに，遊びが盛り上がってくるとやめてしまったりすることがあるんです[18]。S男とY男に乗っ取られたりして。R男がせっかく中に入ったのに，ああ，いいなあって思って入れるように（援助）したのに。すごく無駄なことした。(思い直したように）ただ，でも遊戯室の遊園地はちょっと今日はR男がよかったので。でも年少のときは，S男が側にいるだけでびっくりして，弱い所があったんだけど，年長になったら，少し言えるようになった。

R男がせっかく（レストランの）中に入ったのに，「メニューだよ」って私が言うのは，K男ちゃんが長いことかかえて作った大事なメニューなんだからっていう意味ですね。K男は，真面目だから，上手に動くことが苦手で，遊びの場に入っても，どうしたらいいのかうろうろしてしまう子なんです。

②メニューを見たY男は，「ウサギ用のコロッケが無いんだ！」と繰り返しK男に向かって，K男の立っている所のフェンスを叩きながら強い口調で言う(その間M子が「犬用の食べ物が食べ終わりました」と言うと，D男が「じゃあ，動物用の食べ物はここに」とテーブルを指して，M子に皿を置くように言う)。S男が「お寿司下さい」とD男に注文すると，D男が「お寿司？お寿司ができません。店長に言って下さい」と言うので，ちょうど中に入って来たK男に「お寿司下さい」と言うが，K男は所在なげに調理台の横の椅子に座りかけたり，お盆を持ってうろうろ歩いたりしている。その後，Tは製作コーナーに戻り，手を動かして作業をしながらレストランごっこと遊戯室の遊びにときどき目をやる[25]。

D男が，料理を盛りつけた皿を持って立ち上がり「抹茶のご飯，誰ですか？」とS男たちの方に行って訊く[26]。S男が嬉しそうに「ハムスター用の？はい」，と言いD男が「はい」と言って渡す。その間にM子が「コロッケ下さい」と注文する。D男「今度は，オムライスですか？スパゲティですか？」とS男に訊くと，S男が「ハムスター用のオムライスとお寿司下さい」と答え，D男が「はい」と応じる。

③その間，相変わらずうろうろしているK男に，Y男がイライラしてK男に顔を近づけて「今度は，人用のコロッケと，ウサギ用のコロッケ！」と強い口調で言うが，K男は相変わらず，特にそれには答えず，お盆を持ってふらふらと材料を探しているふうである[27]。Y男がそのK男の腕をつかんで，激しい口調で「人用のコロッケと，ウサギ用のコロッケ下

さい！」と強い口調で言う。いったんコーナーから外へ出てしまっていたR男は，ときどき戻ってきて，「いらっしゃ～い，いらっしゃ～い」と，レストランのチケットを持ってレストランコーナーの周りをうろうろしたり，遊戯室に行ったりしている[28]。

d）Tがコック帽をコック（D男たち）に被せるが，S男が奪い取り，皆がコックになる：①製作コーナーに座って，ときどき遊びの様子を見ていたTは，コック用の帽子（一昨年に使った物）を出してきて，「コックさん，コックさん」と言ってR男，K男，座って調理をしているD男に被せる[29]。

②D男，K男はそのまま被るが，R男（レストランの近くにいた）はTがR男に被せた帽子をすぐに「いやいや」というように頭を振って脱ぎ，帽子をTに返す[29,30]。Tがそれを手に持っていると，S男が「ねえ先生，僕も被ってみたいな」と言ってその帽子を取り，被ってしまう[31]。

③Tが「S男くん，お店の人だったの？」と訊くと，S男は「うん」と言い，すぐにD男に「入れて」と言うと，D男は作りながら明るく「いいよ」と応じ[32]，ちょっと嬉しそうに「お持ち帰りですか？この帽子」と言うと，S男が嬉しそうに「お持ち帰りです」と言い，帽子が大きいので「目が見えない～」などと言いながら部屋の鏡に自分の姿を映してきて「変な人がいる。お薬マンみたい」などといって嬉しそうにしている。どこかに行っていて戻ってきたY男は帽子を見てしきりに「いいな～。いいな～」と言っている。D男は，K男に「卵を割って」と言い，K男が調理台のところで少し作業を始め，Y男も調理台の奥で何か作り始め，D男はS男にハサミを渡して「これでさあ（身体をS男に寄せて紙を見せながら）スパゲティ作って」と言い，M子も含めて5人が料理作りを始める[33]。

> **Tの語り**：（コック帽を持ってきたのは）D男とK男とR男に被せて，役割をはっきりさせたかったんです[19]。S男にはお客さんでいてほしいので[20]。ああ，そうかあ。ここでS男が入っちゃったんだあ。（コック帽は）R男に被せたかったんですけど，私は。それをS男が取って被って（へ）しまったんですね。この援助は失敗ですね[21]（笑）。そっかあ，ああ，入っちゃったんだあ。S男はなかなか素早いですねえ（笑）。面白そうなところとさっととるのは上手い（ト）ですね。

e）Tが客を呼び，遊びが賑わう：こうして，D男，K男，Y男，S男，M子の皆が調理台の所で料理を作り始めるのを見ていたTは[34]，廊下の所からD男たちに「お客さん呼んでもいいですか？」と訊く[35]。D男たちが「いいよ」と言うと，廊下にいた同じクラスの子に「レストランやってるよ」と言う[36]。すると間もなくして，年中組の子どもたち5，6人とその担任Bがレストランコーナーに来る。先ほどから呼び込みをしているR男が張り切って，「こちらから，どうぞ」と言って案内し，D男，S男が「メニューです」と言ってメニューを年中組の担任に渡して，レストランごっこが活気を帯びる[37]。

> **Tの語り**：（お客さんを呼ぶのは，S男たちがコックになったので）お客さんがいなくなったからですね。この状態だと，お客さんが来ないと壊れちゃうなあ[22]，と思ったからです。本当は自分で行かせればよかったんですけど。

(2)事例に対する筆者の分析

以上の事例に対して，筆者はノリの視点から下記のような分析を行った。

この事例で，Tは，子どもたちの遊びのノリが安定するとノリを潜在化してノリからは外在する場所に位置取ることによって遊びのノリからは自立的になり，パースペクティブを展いて遊びのノリについて思考判断を行っているという意味では，「反省的思考」が働いている。そのことを，遊びのノリの視点とTの援助行為との関係から具体的に説明しよう。

①遊びのノリの生成が子どもたち同士で維持されることが難しいので，Tがノリを生成する

最初はレストランごっこのノリが沈滞していた$_{ア}$ので，Tは遊びのノリを喚起する。TはM子とノリを生成し$_{イ}$，D男をノリに引き入れ（呼ぶ：下線3），D男との間に「客―コック」のノリの生成を喚起する（料理を注文する）と，D男はそれにノッて「コック」のノリを生成し始める（料理を作り始める：下線4）。こうして，主にT（レストランの「客」）とM子（「客」），D男（「コック」）の3人によってレストランごっこの

ノリが共同に生成されるようになる（製作コーナーにいるK男は，イメージは共有していると思われるが，「客—コック」のノリからは外れている：下線２）ク。

ノリが生成され始めたコーナーにＳ男とＹ男が侵入し（下線６），「お客さん」として「客—コック」のノリを発動し始める（下線７）エと，Ｄ男がそれにノル（下線８）ようになり，Ｓ男，Ｙ男，Ｄ男の３人の間で「客—コック」の応答的なノリが生成され始めるオ。Ｔはそれを見ながら「コック」のノリ生成を支えたり（アルバイト役になり「材料」を「買い出し」にゆく；下線10），Ｒ男がノリに参入する手助けをしたりして（下線11）カ，次第にノリ生成の中心から周縁へとノリ生成における自らの位置を移動させてゆくキ。Ｄ男，Ｓ男，Ｙ男，Ｍ子が「客—コック」のノリを生成しク，その周縁でＲ男が「コック」として（料理を）作るノリを生成するケようになり，子どもたち同士での遊びのノリ生成が維持されるようになると，Ｔはそれを見ながら，一旦遊びのノリ生成からは外れる（下線12）コ。

②Ｔはノリから外在することによって「反省的思考」が働く

Ｔは，遊びのノリ生成から外在し，製作コーナーに座り，そこから遊びの様子をときどき見るようになるサ。このようにＴは遊びのノリを潜在化しノリからは相対的に自立的になることによって，パースペクティヴが展かれるのである。それによって，Ｔはノリを判断し，望ましいノリのありようを選択することができるようになる。

Ｓ男たちの「客」としてのノリが高揚し（動き回る），ともすれば「コック」の作るノリに侵出する勢いが出てくると，それに対してＤ男のノリが**不協和**を示す（ここにはいられないよ：下線14）シ。それを見取ったＴ（Ｄ男は嫌がっている：波線６）は，これまでのＳ男たちの遊び行動のパターンの想起をもとに，眼前のノリの展開を予想し（トラブルが起きるかもしれない；波線８，Ｄ男たちが作る人になると，このふたりが生き生きとして，Ｄ男たちの遊びが壊れる：波線11），それをもとに望ましいノリの状態を，つまり，Ｄ男がＳ男たちに邪魔されずに作るノリを生成する状態を（Ｓ男・Ｙ男には「お客さん」でいてほしい；波線10）構想し，Ｓ男のノリを沈静化させてＳ男たちが「料理」を作るノリへの侵入を防ぐ関与を実行する（Ｓ男たちがＤ男のノリに参入しないように間接的に方向付ける：下線15，波線15）ス。つまり，Ｔはそれまでのノリの回想とそれによる予想をもとに，眼前のノリを判断し，それをもとに構想した望ましいノリを選択するのである（1度目のノリの選択）セ。

Ｔの関与によって，Ｓ男たちの「客」のノリは一旦沈静化する（下線16）。けれども，まもなく再び活発になり（下線17），Ｄ男がそれにノリ（下線18），**Ｓ男とＤ男との間で「客—コック」のノリが再び生成**され始めるソ。その間，Ｒ男が出来上がった「料理」を提示する（下線19）が，Ｙ男（「客」）とＳ男には受け入れられず（下線20），**Ｙ男（「客」）たちとＲ男（「コック」）のノリが不協和を起こし，Ｒ男はそれを契機に，「客—コック」のノリからは外れ**，場の境界へと移動してしまう（下線21，22）。その間，ＴはＫ男（製作コーナーで完成したメニューを持ってきている）に関わっているので（話している：下線23），パースペクティブは展かれておらず，ノリが不協和を起こしていることには気づいてない。Ｋ男がメニューをＤ男に渡すときに，Ｔはそれを「客—コック」のノリへと媒介しようとする（メニューだよって：下線24）。

その後，Ｔは製作コーナーに戻り，再び，遊びをパースペクティブの布置の中で捉えられる位置（製作コーナー下線）に身を置く（下線25）。

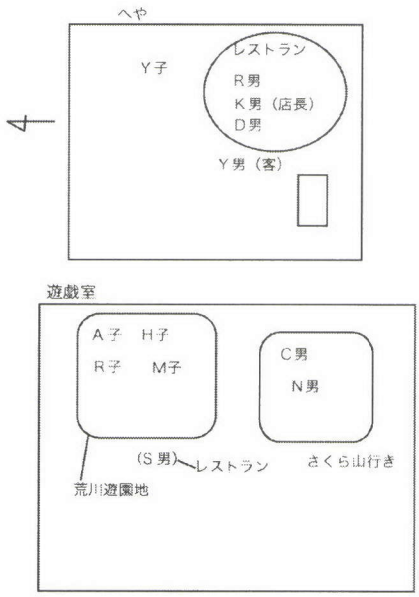
レストランコーナーの中は，それまでは「お客さん」の注文に応じるだけだったＤ男（「コック」）が，自分の方からもノリを発動するようになり（下線26），Ｄ男とＳ男・Ｙ男で「客—コック」のノリの生成が活性化する。Ｋ男はそのノリの生成に顕在的には参入していないが潜在的には共有していると思われる（その場に居続ける；下線27）ようになる。こうして，**Ｄ男・Ｋ男・Ｓ男・Ｙ男の４人の間で「客」が注文し「コック」は作りながら「客」に応じるという「客—コック」のノリが共同に生成されるようになる**チ。

そこに，それまで製作コーナーでパースペクティブを展いていた（と思われる）Ｔが，「コック」のノリにＳ男たちが参入しないようにするために（Ｓ男たちはお客さんでいてほしい；波線20），コック帽をＤ男，Ｋ男と既にレストランの外にいて「コック」のノリからは外れているＲ男に被せ（下線29），**Ｄ男・Ｋ男・Ｒ男が「コック」としての作るノリを生成するメンバーであり，Ｓ男・Ｙ男が「客」のノリを生成するメンバーであることを，シンボルによって区別し，固定化しようとする**（役割をはっきりさせようと思った：波線19，２度目のノリの選択）ツ。ここにおいてＴは，１

度目と同様に，**D男たちが作るノリ生成の中心に位置し，そこにS男たちが侵入しない状態を望ましいノリとして構想し，選択している。**

しかし，遊びのノリの展開はそのようなTの願うノリの方向性を裏切り，既にノリから外れていたR男はシンボルの装着を拒否し（下線30），それをS男が奪い取って装着する（下線31）$_{テ}$。**こうして，D男・K男・S男が「コック」のシンボルを共有し**$_{ト}$，**同時に「コック」として料理を作るノリにS男も参入し，そこにY男も参入してM子も加わり，D男・K男・S男・Y男・M子の5人が作るノリを共同に生成し始める**（下線33）$_{ナ}$。D男のノリにS男たちがノルことを見取った（援助は失敗ですね：波線21）Tは，それまでの援助の方向（S男たちがD男のノリに侵入しないようにする）を修正し，同時にそのノリの展開を予測し（このままでは壊れてしまう：波線22），望ましいノリの状態（コックと客が応答的なノリを生成する）を構想し（3度目のノリの選択），新たな関与を行っている（客を呼ぶ：下線35，36）$_{ニ}$。「客」として訪れた4歳児たちとD男たちの間で「客―コック」のノリが活性化する（下線37）$_{ヌ}$。

以上の分析をもとに，筆者はTが実践中に「反省的思考」が可能となる状況にいる（ノリから外在している）にも関わらず遊びのノリの変化を読み損なっていることを示した。事例において，Tが遊びのノリから外在し，遊びのノリを読み取り，それを判断し，望ましいノリのありようを構想し，そのノリを実現するための自身の関与の方法を構想して，言いかえれば「反省的思考」を働かせて援助行為を行っていると思われる場面は3度あるが（下線セ，ツ，ニ），そのうちの2度目の関与の直前の読み取りは，遊びのノリの実際の変化を捉えていなかった。すなわち，1度目の場面では，D男（「コック」）のノリとS男・Y男（「客」だが，「コック」に侵出しそうになる）のノリが不協和であった（下線14，下線シ）のだが，2度目の場面では，両者のノリは協和しており，「客―コック」のノリが活性化している（下線26，27，下線チ）に



荒川遊園地はずっと続いている遊びで，空き箱を使ったペット（動物）を作り，それを遊ばせている。今日は，「ここは○○する部屋」などとイメージを出して，共有して遊んでいた。

隣のC男も「さくら山行きです」と言って，連動している。

部屋のレストランごっこは，はじめて出てきたヒットのごっこでTがだいぶ入り込んだ。年中組がきてからおすしやピザなど考えていた。いろいろ作れるといい。

K男店長（まだ状況に応じてお客さんを構う，対応するという動きがない。援助が必要）はお客さんが来ているときにメニューを製作コーナーで描き，D男1人が立ち向かい，R男はチケットを配りに行っていた。

図2　担任Tのレストランごっこの記録

も関わらず，Ｔは相変わらずＳ男たちとＤ男たちのノリが不協和なままだと捉えていた。その一方で，２度目の場面では，「コック」のノリにＤ男とは不即不離の状態で加わっていたＲ男が，３度目の場面では，「コック」のノリからは外れている（レストランごっこのノリの周縁に移動している。下線28）。このようにノリ生成のありようが変化しているにもかかわらず，Ｔはそのことに気づいていなかった。そして，筆者は，このように保育実践中にパースペクティブを展き，遊びのノリについての思考判断が可能となっている場合にもかかわらず，Ｔがノリの状態や生成メンバーの変化を読み損なうのは，人間関係についての固定観念（Ｓ男とＹ男はＤ男たちの遊びをいつも乗っ取る妨害者である）があるためであること，またその場合，記録（当事者記録）も固定観念に呪縛された物語となってしまい（図2），自身の実践を省察する場であるはずの記録が，省察の場にはなりえないということを示した（岩田　2010）。

Ⅲ　保育者と第三者の映像解釈の特質

以上のように，保育者が固定観念に呪縛されている場合，映像情報をどのように用いれば，映像の持つ反省的思考を促す装置としての有効性を発揮し，保育者が自らの見方を相対化し，実践を省察できるのだろうか。

結論から言えば，映像情報は，固定観念に囚われていない第三者がその読み取りと解釈を提示し，それを保育者の読み取りと突き合わせることによって，保育者の「反省的思考」を促す装置となりうると考える。

(1)「事実的判断」と「価値判断」

そのことを論じるために，まず，保育者の映像解釈と第三者の映像解釈の違いについて論じておこう。ノリの状態の読み取りをできるだけ「正確に」行うためには，ノリの状態がどのようなものであるか（沈滞している，活気がある，協和，不協和，など）についての「事実的判断」が必要である。このような「事実的判断」は，そのノリに対する「価値判断」（良い，悪いというような）に優先されるべきである。例えば，「遊びのノリが最初は沈滞していたが，次第に活気づいてきた」という「事実的判断」をまず行い，その後に，沈滞していたノリが活気づいてきたので，「好ましい」という「価値判断」を行う必要がある。

このように「価値判断」を一旦括弧に入れて「事実的判断」を優先させ，それに基づいて，「価値判断」を行うことを，遊びを援助する当事者（保育者）が実践中に行うことは，容易なことではない。というのは，子どもの遊びのノリの状態は常に変化するので，「事実的判断」をまず行ってから「価値判断」を行うというような熟考する物理的余裕はないからである。また，保育者は常に眼前に展開される遊びのノリに対して望ましい方向になってほしいという「願い」を持って遊びのノリを読み取るので，そこには必然的に「価値判断」を伴うからである。それゆえ，「事実的判断」と「価値判断」が融合したかたちで読み取られることが多い。例えば，「もっと，メンバーの数が増えるといい」という読み取りには，「メンバー数が少ないので活気がない」という「事実的判断」と，「(活気がないので）ノリの状態はあまりよくない」という「価値判断」の両方が含まれている。

このことは，保育者が人間関係等についての固定観念を持っている場合，その固定観念が遊びのノリの読み取りに入り込みやすいことを意味している。そして，実践中のこのような解釈傾向は，実践当事者が自身の実践が録画された映像の中の遊びを読み取る場合にも必然的に生じるだろう。そこに，たとえカメラアイによって撮られた「意外な」情報が含まれていたとしても，「意外な」情報は「意外な」まま放置されるか，先入観として入り込む固定観念によって解釈されてしまう危険性が高い。

これに対して，実践当事者ではない第三者は，眼前のノリに対して自らが関与しなければならないという役割を持たないこと，また，特に映像を読み取る場合は熟考する余裕も持ちうるので，「価値判断」よりも「事実的判断」を優先させることができる。それゆえ，先入観を一旦排除した「事実的判断」を行うことが比較的可能であるがゆえに，第三者が現場で実践を見る際には気づかなかった「意外な」情報が含まれている場合，それをもとに自身の読み取りを問い直し，「意外な」情報が意外ではなくなるような読み取りを新たに構築することができる。

以上のように考えるなら，第三者の映像解釈は，保育実践当事者の自らの実践映像解釈よりも，妥当性が高いだろう。保育実践当事者が自身の実践を省察するためには，映像情報のみでなく，第三者の映像解釈を提示することが必要なのはそれゆえである。

(2)「保育者の映像解釈」と「第三者の映像解釈」の比較—より解釈妥当性の高い「第三者の映像解釈」

以上のことを，事例をもとに示しておこう。ここでは，「第三者の映像解釈」として筆者の解釈（前掲「ノリの視点からの分析」）を取り上げ，Tの語りを「保育者の映像解釈」として，両者を映像と照合し，より映像と適合していることを「映像解釈妥当性が高い」と言うことにする。ただし，映像そのものをここに掲載することはできないので，ここでは，映像情報を逐一文字記録化することによって作成したトランスクリプトをもとに言語化したものを「映像による記録」（前掲の【事例】がそれに該当する）として，「Tの映像解釈」と「第三者の映像解釈」を「映像による記録」に照合したい。それによって，「第三者の映像解釈」の方が固定観念に囚われている「保育者Tの映像解釈」よりも解釈妥当性が高いことを示し，続いて，「保育者Tの映像解釈」がどのように固定観念によって囚われているのかを照らし出す。これによって，Tの映像を読み取るまなざしが，映像に映った遊び現象をどのように観念化しているかが具体的に示されることになると同時に，「第三者の解釈」を「Tの解釈」と突き合わせることによってTの読み取る視点を相対化することが可能となることが実証されることになる。以下，詳述しよう。

26頁に示す表1は「映像による記録」と「保育者Tの映像解釈」と「第三者の映像解釈」を図化して比較したものである。「映像による記録」欄の図は，事例の記述（「映像による記録」）と映像をもとに，レストランごっこの場面を俯瞰図として示したものである。「保育者Tの解釈」欄の図は，「Tの語り」から，映像に映っていない情報（表1二重下線部分）を注意深く除き，Tが映像に映されている遊び場面をどのように読み取り，解釈しているかを図化したもの

である。そして，ノリの視点から筆者（第三者）が解釈した事例場面を図化したものが「第三者の映像解釈」欄の図である。

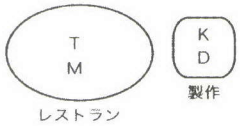
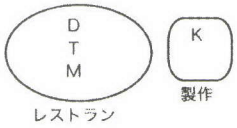
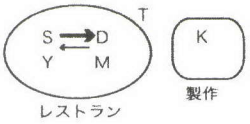
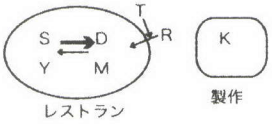
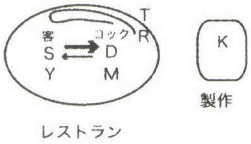
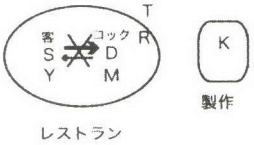
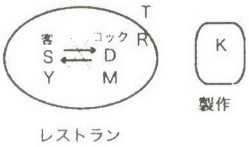
この三者の図に書かれた遊びメンバー，メンバーの位置関係やメンバー間の矢印（コミュニケーションのありよう）を見比べると，事例に登場するM子，D男，K男，S男，Y男，R男の6人に関するTと第三者のそれぞれの読み取りについて，次のことが判明する。

まず，M子とK男については，「映像による記録」欄の図における行動の流れと「保育者Tの映像解釈」「第三者の映像解釈」それぞれの欄の図に表された行動の流れは，おおよそ一致している。すなわち，M子は，「映像による記録」欄においては，最初レストランコーナーでメニューを書いており，その後，レストランごっこの遊びが変化の過程において一貫して料理を作る「コック」の役割を担っているという行動の流れであり，それは「Tの映像解釈」欄の図においても，「第三者の映像解釈」欄の図においても同様である。また，K男の行動は，「映像記録」によれば，場面a～b前半まではずっと製作コーナーにいてメニューを書いており，その後レストランコーナーに来て，あまり活発に動くわけではないが，「コック」の役割を担い，コック帽を被って料理を作る，という流れである。「Tの映像解釈」も「第三者の映像解釈」も同様の流れを示しており，この意味では，M子とK男についての読み取りは，保育者と第三者の映像解釈妥当性において，ほぼ同等であると言ってよい。

しかしながら，D男，S男，Y男，R男については，様相を異にしている。まず，「第三者の映像解釈」の図が示しているのは，第三者は，この4人についても，それぞれ「映像記録」とほぼ同じ行動の流れとして読み取っているということである。すなわち，R男は，場面a④でTの仲介によってレストランごっこに加わるのだが，作っていたパスタをS男に否定されてレストランごっこからは一旦外れる（場面c①）。その後「いらっしゃ～い，いらっしゃ～い」という呼びこみの声を出して，レストランの周囲で（レストランの）チケットを売り歩き，そこでTに帽子を被せられかける（場面d）が，すぐに自分で帽子を脱いでしまい，「コック」にはならず，「客」として来た4歳児のレストランへの呼び込みをする。「第三者の映像解釈」の図におけるR男の行動の時間的推移は，「映像による記録」の図におけるそれと適合している（表2参照）。それに対して，「Tの映像解釈」の図に表れるR男の動きは，その流れとは矛盾している。というのは，「Tの映像解釈」の図によれば，R男は一旦レストランごっこを抜けたにも関わらず（場面c①），その次の場面c②ではR男は再びレストランごっこのメンバーであることになっており，それはTに帽子を被せられる時（場面d①）以降も続いているからである。つまり，Tの解釈は，R男の行動の文脈を映像に沿って読み取ってはいないということになる。Tの映像解釈におけるR男の読み取りは，この点で妥当性を欠いている。

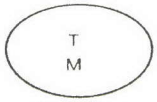
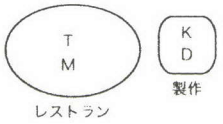
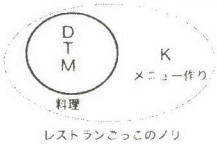
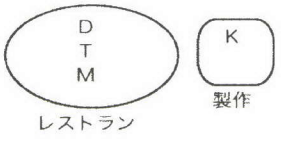
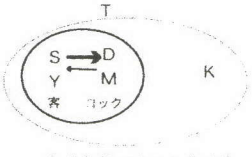
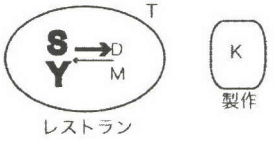
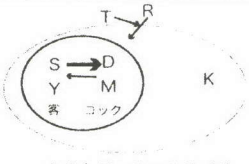
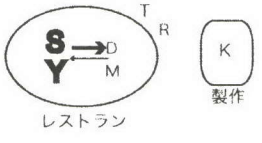
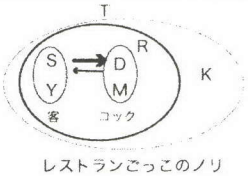
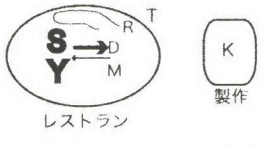
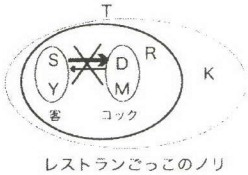
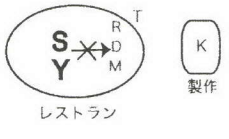
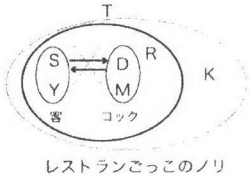
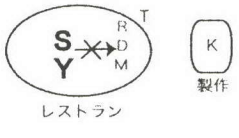
さらに，D男とS男，Y男についても，「Tの解釈」は，「第三者の映像解釈」と比較して，映像解釈の妥当性が低い。「映像による記録」からは，D男とS男・Y男の間には，場面bにおいては葛藤があり（b①），その後も葛藤が続いている様子が窺える（場面c①）が，場面c②以降は，D男の方からもS男の要求に合う

表１：「映像による記録」と「第三者の映像解釈」と「保育者Ｔの映像解釈」の比較

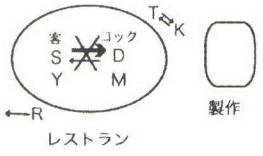
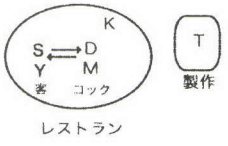
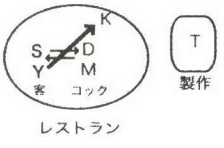
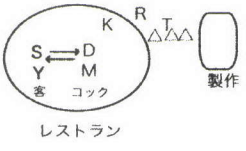
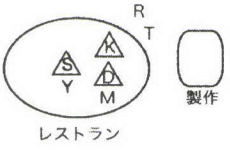
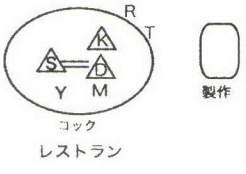
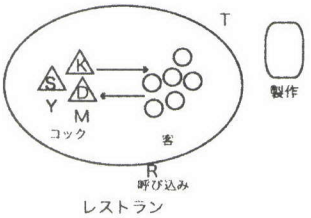
事例の場面		映像による記録		第三者
		映像による記録（事例の記述）	状況の俯瞰図	解釈（筆者の分析）
a	①	Ｄ男とＫ男，Ｒ男がレストランごっこをやると言っていたのに，始まらず（下線1），Ｋ男は製作コーナーでメニューを書いており（下線2），レストランコーナーにはＭ子が１人で座ってメニューを書いており，そこにＴが加わる。		レストランごっこのノリが沈滞しており（下線ア），ＴがＭ子とノリを生成し始める（下線イ）。
	②	Ｔが「他に何がある？」とＭ子と話しながら，Ｄ男を呼ぶ（下線3，4）。		ＴがＤ男をノリの生成に引き入れ，３人でノリを共同に生成する（下線ウ）。
	③	レストランコーナーの周りに，５，６人の子どもたちが集まって中を見ていたが，その中のＳ男とＹ男は，ずかずかとレストランコーナーに入って（下線6），「客」として注文を始め（下線7），Ｄ男がそれに応じ始める（下線8）。		Ｓ男とＹ男が「客―コック」のノリを発動し始め，Ｄ男がそれにノッて，３人で「客―コック」のノリが生成され始め（下線エ，オ），Ｔはそれを見ながらノリの周縁へと移動する（下線キ）。
	④	Ｒ男がレストランコーナーの近くにくる。椅子を置いてＲ男に示す（下線11）。		ＴはＲ男がノリの参入する手助けをする（下線オ）。
		Ｒ男は椅子にすぐには座らず，材料を探す。Ｋ男は製作コーナーでずっとメニューを書いている（レストランコーナーにはなかなか来ない）。		Ｄ男，Ｓ男，Ｙ男，Ｍ子が「客―コック」のノリを共同に生成するようになり（下線ク），Ｒ男はその周縁で「コック」のノリを生成する（下線ケ）。Ｔは遊びのノリから外れる（下線コ）。
b	①	Ｔは製作コーナーに座り，遊びの様子をときどき見ている。Ｓ男たちの客の注文が活発になってきて，Ｄ男がＳ男たちに「Ｓ男君，ここには居られないよ」と言い，Ｓ男たちが呆然とし，緊張感が走る（下線14）。		Ｔはノリから外在し，レストランごっこのノリを観察する（下線サ）。Ｓ男たちのノリが高揚し，「コック」のノリに侵出する勢いを見せ，それに対してＤ男のノリが不協和を示す（下線シ）。
	②	ＴがＳ男に「お客さんでしょ」と言い，一旦Ｓ男達の動きは沈静化する。		Ｓ男たちのノリを沈静化させて，コックのノリへの侵入を防ぐ（下線ス）。

Ｔ：保育者Ｔ，　Ｍ：Ｍ子　　Ｄ：Ｄ男　　Ｋ：Ｋ男　　Ｓ：Ｓ男　　Ｙ：Ｙ男　　Ｒ：Ｒ男

アルファベットが太字になっている場合（「保育者の映像解釈」欄）は，その子どもの存在感の大きさを示す。

の映像解釈	保育者Ｔの映像解釈	
図	「Ｔの語り」に表れたＴの遊びの読み取り	図
	枝葉のところ（メニュー）をやっている。メニューがＲ子１人だけでなく，レストランのメンバーに分かるようにした方がよいと思い，コーナーに加わり，流れを作ろうと思った。	
		
	Ｓ男とＹ男が入ったのは，乗っ取りである。 Ｓ男とＹ男は**いつも**他の子どもたちが面白そうな遊びをしていると真ん中に入って乗っ取ったり壊したりする。	
	Ｒ男がレストランごっこに入ってくれるといいな，と思った。	
	Ｒ男（がすぐに座らないの）は，Ｒ男は接客が嫌で，作る方が好きだから。Ｋ男がいつまでも製作コーナーにいるのは，Ｋ男は集中してしまうから。Ｋ男は真面目な子で，没頭すると周りが見えなくなる。	
	Ｄ男は，Ｓ男とＹ男が入るのが嫌だと思っている。	
	トラブルが起きそうな感じが長引きそうだ。遊びが壊れてしまうかもしれない。 **いつも**Ｓ男とＹ男は遊びを乗っ取るから，Ｓ男とＹ男が入るときっとトラブルになるだろう。	

矢印（→または←）は，働きかけの方向を示す。矢印の太さは，働きかける力の強さを示す。また，矢印の上に書かれた×印は，両者の間に葛藤があることを示す。

事前の場面		映像による記録		第三者
		映像による記録（事例の記述）	状況の俯瞰	解釈（筆者の分析）
c	①	S男たちは再び活発になり，D男たちに矢継ぎ早に注文する（下線17, 18）。R男が作ったパスタに対して（下線19），S男が「パスタを注文したのではない」と強く否定し（下線20），R男はコーナーから抜ける（下線21）。		
	②	D男がS男の望んでいたハムスター用の料理（抹茶のご飯）を作り，S男が喜ぶ（下線26）。		D男，S男，Y男，K男（潜在的）の間で「客―コック」のノリが共同に生成される（下線チ）。
	③	Y男が強い口調でK男に注文する。		
d	①	TはD男・K男・R男にコック帽を被せようとする（下線29）。		D男・K男・R男が「コック」のノリ生成メンバーであり，S男・Y男は「客」のノリ生成メンバーであることをシンボルによって区別し，固定化しようとする（下線ツ）。
	②	R男は帽子を被るのを嫌がりTに返す（下線30）。すると，S男が「被りたい」と言ってTの手から帽子を取り，被る（下線31）。		R男はシンボルの装着を拒否し，それをS男が奪い取って装着する（下線テ）。こうしてD男・K男・S男が「コック」のシンボルを共有する（下線ト）。
	③	S男が入ることをD男が許可し（下線32），D男がS男にハサミと紙を渡しながらスパゲティを作るように頼む（下線33）。		S男が「コック」のノリに参入し，Y男，M子も参入して，D男・K男・S男・Y男・M子が作るノリを共同に生成し始める（下線ナ）。
e		Tが声をかけた4歳児が「客」としてやってきて，レストランが賑わう（下線37）。		「客」として訪れた4歳児たちとD男たちの間で「客―コック」のノリが活性化する。

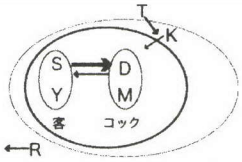
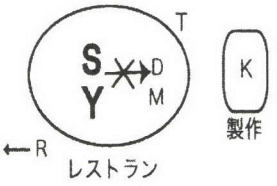
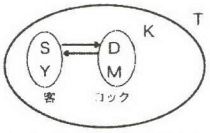
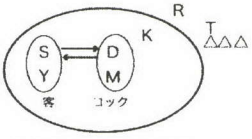
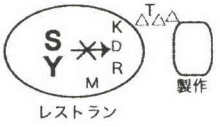
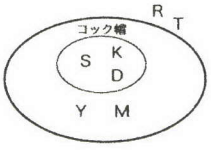
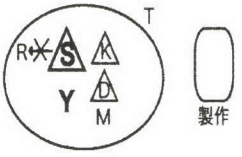
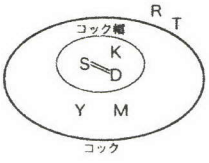
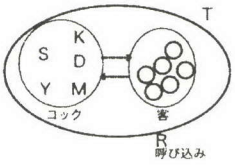
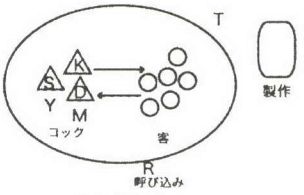
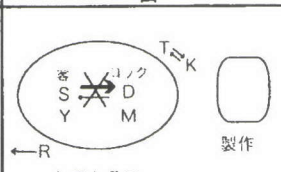
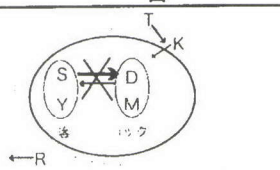
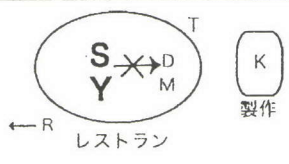
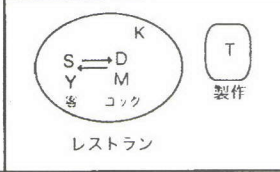
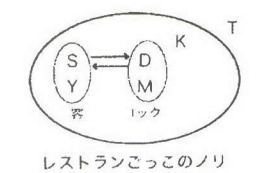
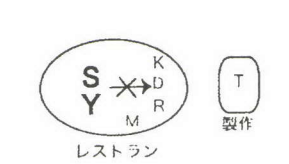
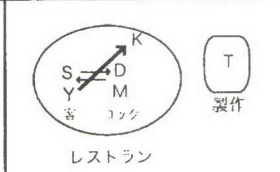
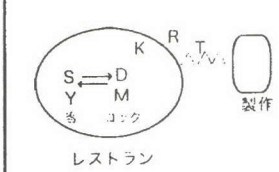
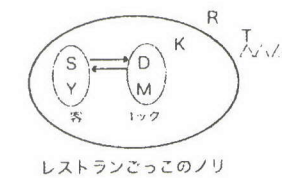
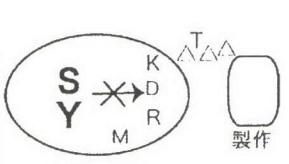
の映像解釈	保育者Ｔの映像解釈	
図	「Ｔの語り」に表れたＴの遊びの読み取り	図
 レストランごっこのノリ	（Ｒ男がいなくなることに最初は気づかず，気づいてから）パスタを作ったのにＳ男に怒られて気分を悪くしたから？（と確認）かわいそうなことをした。	
 レストランごっこのノリ		
 レストランごっこのノリ △はコック帽	コック帽を持って来たのは，それによってＤ男・Ｋ男・Ｒ男であることをはっきりさせたいと思ったから。Ｓ男たちにはお客さんでいてほしい。	
 レストランごっこのノリ	Ｓ男が取って被ってしまった。Ｓ男は素早い。面白そうなところをさっさと取るのは，やはり上手い。	
 レストランごっこのノリ		
 レストランごっこのノリ	Ｓ男たちもコックになり，お客さんがいなくなったため，お客さんがこないと遊びが壊れると思った。	

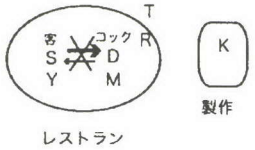
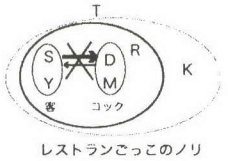
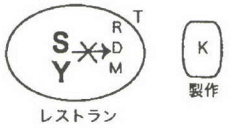
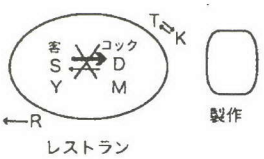
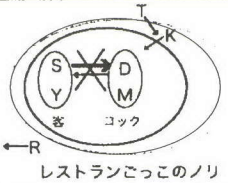
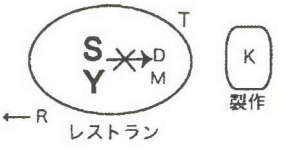
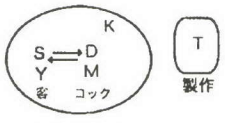
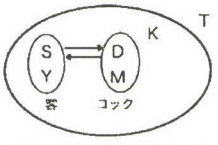
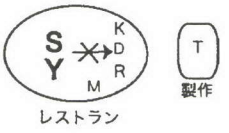
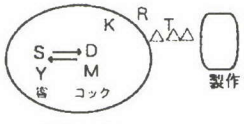
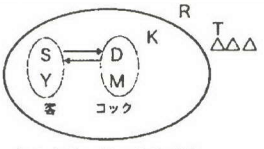
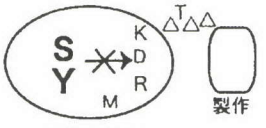
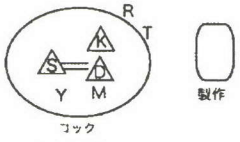
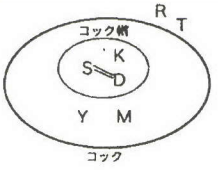
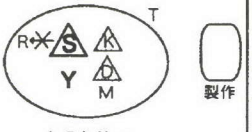
表２　Ｒ男の行動についての「Ｔの解釈」と「第三者解釈」

場面		映像による記録	第三者の映像解釈	保育者Tの解釈
		図	図	図
c	①			
	②			
	③			
d	①			

ような「料理」を作る（下線26）など両者の間にあった葛藤は縮減しており，場面ｄでは，Ｓ男が「コック」になることの許可を求めるとＤ男は快く返事をして（下線32），その後，一緒に料理を作るように頼んでおり（下線33），両者の間の葛藤はほぼ完全に消失し，むしろ和気藹々と遊びを展開している様子が書かれている。「第三者の映像解釈」における場面ｂから場面ｄの図の展開は，その流れと矛盾するものではない。場面ｂから場面ｄにおける「映像による記録」の図と「第三者の解釈」の図を比較してみれば（表3），そのことは明らかである。

それに対して，「Ｔの映像解釈」は，このようなＤ男とＳ男たちの関係性の変化をとらえたものとはなっていない。「Ｔの映像解釈」が示しているのは，場面ｂで生じたＤ男とＳ男たちとの間の葛藤が，場面ｄまで一貫して続いているということである（表３参照）。「Ｔの解釈」によれば，場面ｂでＳ男たちが遊びに侵入したのは，「乗っ取り」であり，それゆえにＤ男は

表3　D男とS男・Y男関係についての「映像による記録」と「Tの解釈」と「第三者の解釈」の図の比較

場面		映像による記録	第三者の映像解釈	保育者Tの映像解釈
		図	図	図
b	①			
c	①			
	②			
d	①			
	③			

S男たちが遊びに入ることを嫌がっており，S男たちが遊びの中心になるとD男たちの遊びが壊れてしまうかもしれない（場面b）ので，S男たちは「コック」にはなるべきではないのである（S男たちにはコックにはなってほしくない：場面b，c，d）。このように，Tの解釈は，D男とS男・Y男の関係性に関しても，映像解釈の妥当性を欠いている。

(3)「Tの解釈」はいかにして映像から乖離していくのか—固定観念による「事実的判断」の妨害

以上のように，「Tの解釈」が「第三者の解釈」よりも解釈妥当性が低くなってしまうのは，「第三者の解釈」が，「価値判断」よりも「事実

的判断」を先行させているのに対して，「Ｔの解釈」は「価値判断」が先行し，そこに固定観念が入り込むことによって，「事実的判断」を妨害しているからである。具体的に述べよう。

「Ｔの解釈」は，最初から映像から乖離してしまっているわけではない。表１における「Ｔの解釈」の図を「映像による記録」の図と比較すると，場面ａの①～③は，「映像による記録」の図と一致している。つまり，「映像による記録」との適合性は高く，解釈妥当性が高いと言える。その後，一致する度合いが低くなるが，事例の最後の場面（場面ｅ）では再び一致しているので，この場面も遊び場面映像の読み取りにおいては妥当性が高いと言える。つまり，Ｔは場面ａの前半部と場面ｅにおいては，遊びのノリを映像に沿って読み取っていると言えるだろう。

「Ｔの解釈」が「映像による記録」から乖離し始めるのは，Ｓ男とＹ男が映像に登場する場面ａ④からである。「第三者の解釈」は，Ｓ男・Ｙ男がレストランコーナーに入る（場面ａ③）のは，「侵入」であり（下線エ）（「事実的判断」），Ｓ男たちのノリがＤ男たちのノリを圧倒するために，両者のノリが不協和を起こし（下線シ），その後協和していくようになる（場面ｃ，下線チ）（「事実的判断」），というものである。これに対して，同じ場面に対する「Ｔの解釈」は，Ｓ男・Ｙ男がレストランコーナーに入ることをふたりによる「乗っ取り」（波線１）と解釈し（「価値判断」），それゆえにこそＤ男はＳ男・Ｙ男との間に葛藤を生じる，という解釈になっている（場面ｂ③：波線７）。例えば，Ｔは「せっかくＤ男・Ｋ男・Ｒ男の３人が遊んでいるのに」Ｓ男とＴ男が遊びに入ると，それを壊してしまう，と予測している（場面ｂ：波線14，16）。つまり，Ｔの解釈によれば，Ｓ男たちのノリは，Ｄ男たちのノリを「乗っ取り」「壊す」ような「好ましくないノリ」（「価値判断」）であるのに対して，Ｄ男たちのノリは「好ましいノリ」（「価値判断」）なのであり，前者が後者を壊す怖れがあるのである。

このＴのノリに対する「価値判断」は，注目すべきである。というのは，そこには，「事実的判断」が含まれていないからである。映像から読み取るノリが，「好ましい」のか「好ましくない」のかは，ノリの「事実的判断」をもとに行われるべきである。しかしながら，Ｔは，Ｓ男たちが遊びに入った場面で，Ｓ男たちとＤ男のノリ生成の「事実」を読み取るよりも前に「乗っ取り」だと判断しているのである。Ｔがそのようにノリを評価する根拠は，Ｔの人間関係やパーソナリティに対する既成の固定観念である。例えば，ＴはＳ男たちが遊びに入る場面を「乗っ取り」だと明言した後，Ｓ男たちはいつも他の子どもの面白そうな遊びを乗っ取るのだと言っている（波線１）。あるいは，Ｄ男がＳ男たちが遊びに入ることを「嫌だと思っている」のだ（波線６）と解釈する根拠は，いつもＳ男たちは遊びを乗っ取るから（波線７），というＳ男に対する既成の一般化された観念である。このように，Ｔは映像の遊びのノリを読み取る際，そのまなざしにメンバーに対する固定観念が入り込み，ノリの「事実的判断」以前に，人間関係やパーソナリティについての既成の固定的な観念によって「価値判断」を行ってしまっているのである。

このように保育実践当事者であるＴの解釈は，「価値判断」に固定観念が先入観として入り込

み，そのことによって「事実的判断」を妨害している。それゆえにこそ，場面ａ④から場面ｄ①の過程におけるＤ男とＳ男たちのノリ生成のありようは，「事実的判断」を優先させている「第三者の解釈」によれば，不協和から協和へと変化しているのに対して，「Ｔの解釈」は不協和のまま変わらないのである。

このように固定観念が先入観となり「価値判断」が先行し，「事実的判断」を妨害する場合，眼前のノリを固定観念の現実化された一具体例として解釈することも起こりうる。Ｒ男が遊びのノリから一旦外れる場面（場面ｃ①）に対する「Ｔの解釈」はそのことを示している。「第三者の解釈」によれば，Ｒ男が遊びのノリから抜けるのは，Ｓ男たちに作った物を否定されたためであり，それゆえにこそ，その後に帽子を被らされそうになった際には拒否するのである（下線ト）。それに対して，Ｔは，Ｒ男は遊ぶ力があるのに，Ｓ男たちが遊びを乗っ取るような場合に，遊びから抜けてしまうことがある（波線18），と言って，よくある一場面として解釈している。しかも，この解釈をＴが述べるのは，Ｒ男の文脈上から読み取れるＲ男が抜ける理由に気づいた（波線17）後である。このことが示しているのは，Ｔが映像から読み取れるＲ男の姿を，Ｔの既成のＲ男像に位置づけようとしていることである。このようなまなざしは，結果として，映像情報から読み取れるはずの行動文脈を読み取ることを不可能にしてしまう。というのは，映像の各場面を観念の具現化の一例ととらえることは，映像から読み取れる子どもの行動の流れを，切断してしまうことだからである。Ｔが場面ｃ①を見た際に，Ｒ男が遊びのノリからから一旦外れることに気づきながら，その直後の場面ｃ②③，場面ｄを視聴する際に，その「気づき」が消失し，Ｒ男は依然として遊びのノリ生成のメンバーとして捉えられているのは，それゆえである。

以上のように，保育実践当事者が映像を見る場合，「価値判断」を先行させることによって「事実的判断」を妨げる危険性を持つとすれば，固定観念にとらわれず「価値判断」よりも「事実的判断」を優先させる可能性の高い第三者が映像を解釈し，それを保育者に提示し，保育者の解釈と突き合わせることが必要となる。それによって，保育者の見方がどのように映像情報に含まれる「事実」を捉え損ない，解釈が観念化されてしまっているかを照らし出すことが可能になるのである。

Ⅴ おわりに
―映像はどのように用いられれば，反省的思考に有効な装置となりうるか

本稿では，保育実践が収録された映像の実践当事者（保育者）による解釈と第三者による解釈を比較し，固定観念にとらわれていないがゆえに「事実的判断」を優先させることのできる後者の方が解釈妥当性が高いことを示し，前者は固定観念が「事実的判断」を妨害してしまっていることを示した。

この事実が示すのは，保育者の見方を相対化し実践を省察するために，第三者の解釈が持つ意義である。映像情報はそれのみでは意味を持たないが，それが言語化され（「映像による記録」），解釈され（「第三者の解釈」）て「第三者記録」として構成され，それを保育者の解釈と突き合わせることによって初めて，保育者は実践を省察することができるのである。「第三者記録」

(「映像による記録」と「第三者の解釈」) は，保育者実践の反省的思考を深めるための触媒なのである。そして，「映像による記録」は，「保育者の解釈」と「第三者の解釈」の妥当性を検討するために重要な役割を持つのである。

このように「第三者記録」によって保育者の自己省察が可能となり，遊びに対する関与についての新たな展望が開かれると言えるだろう。

注

1.「ノリ」とはいわゆる「リズム」のことである。しかし，「リズム」という用語は本来，「身」（市川浩）という言葉に象徴されるような関係的存在としての身体の生み出す時間的かつ空間的概念であるにもかかわらず，一般には近代的時間概念に収斂するものとして考えられる傾向があるので，筆者はそのようなリズム概念とは区別する意味で，「ノリ」という言葉を用いている。「ノリ」とは，関係的存在としての身体による行動の基底にあるリズム，およびその顕在の程度，すなわちリズム感，また，身体と世界との関係から生み出される調子，気分のことであり，筆者は「ノリ」概念を用いて，読み聞かせの場における子ども集団の反応や子どもの遊びについて分析・考察を行ってきている。詳しくは，岩田（2007，及び2009，82頁～83頁）を参照。

2. ここでは，カメラアイによって録画され，映像に含まれている情報を「映像情報」あるいは「映像」と呼び，それを視聴する第三者（実践当事者ではない）が言語化したものを「映像による記録」と呼ぶことにする。映像をもとに事例として書き起こしたものは，これに相当する。ただし，「映像情報」の言語化は第三者の目によって情報の選択がなされており，自覚化されないかたちでの第三者の解釈視点が入っている。そのような「映像による記録」に対して，ここで言う「第三者の解釈」とは，第三者の自覚化された視点による解釈によって，映像情報の読み取りにおいて一貫したとらえ方がなされているものである。そして，「映像による記録」と「第三者の解釈」の両方を合わせて「第三者記録」と呼ぶことにしたい。

3. 本来は，インタビューのやりとり全てを示すべきだが，膨大なので，ここではTの語った部分を文章としてまとめた。

引用文献

岩田遵子『現代社会における「子ども文化」成立の可能性―ノリを媒介とするコミュニケーションを通して』風間書房，2007

岩田遵子「遊びの援助における『見る』ことと『関わる』ことの関係性(1)」『東横学園女子短期大学紀要』第43号，2009，69頁～83頁

岩田遵子「遊びの援助における『見る』ことと『関わる』ことの関係性(2)―第三者記録の必要性―」『東京都市大学人間科学部紀要』創刊号，2010，1頁～18頁

小川博久・岩田遵子「教育実践における『反省的思考』論の可能性の再検討(1)」『児童学研究―聖徳大学児童学研究所紀要』第11号，2009年，75頁～82頁

小川博久・岩田遵子「教育実践における『反省的思考』論の可能性の再検討(2)」『児童学研究―聖徳大学児童学研究所紀要』第12号，2010年，31頁～39頁